

## 名作再読、拾い読み (32)

### 『悲しき酒場の唄』(2) (*The ballad of the sad cafe*)

小澤文彦

(前号からの続き)

ライマンがミス・アメリカと一緒に暮らし始めてから、店には8台のテーブルと自動ピアノが入り、酒場としてどんどん賑やかになっていきます。毎晩客が入り、土曜日には大変な人混みとなりました。町の殆ど全ての人が少なくとも週1回は酒場に来るようになったのです。工場で働く人達にとって人間の命が無価値に感じられることがあるのですが、ここに来れば、自分はこの世で大した価値が無いという心の奥の苦い思いを忘れることができました。酒場は、人間としての誇りを取り戻せる貴重な存在となったのです。

ミス・アメリカは体の弱いライマンを献身的に世話し続け、二人はいつもどこでも一緒でした。筋骨逞しい大女と彼女の腰までしかない虚弱な小男というカップルなので、口さがない人達は彼らの愛し方について様々な憶測をたててのでした。

ライマンが来てから6年経った8月のある晩に、ミス・アメリカが以前に結婚して10日間だけ一緒に過ごしたマーヴィンが町に戻ってくるといふ知らせが届きました。彼はあちこちで強盗事件を起こして服役していたのですが、保釈を受けて出所したというのです。

マーヴィンは捨て子でした。親切な家で育てられたのですが、札付きのワルに育ちました。背は高く、体は頑健、夢見るような瞳と巻き毛の髪を持った美男子なので、ハンサムなワルに憧れる娘達の何人かは、彼の格好の餌食となりました。この評判の悪いマーヴィンがなぜかミス・アメリカに夢中になったのです。それも、財産目当てでなく愛情一筋からでした。2年間良い人間になる努力を続け、見違えるほど善人になって頭頭女と結婚することになりました。ミス・アメリカは結婚しても素っ気ない態度で、マーヴィンが彼女に自分の全財産を贈ってもその態度に変化はありません。そして、遂に一夜もベッドを共にすることなく彼を家から追い出してしまったのです。その理由は全くの謎でした。その後、マーヴィンは昔の悪人に戻り、強盗事件を引き起こすようになります。

そのマーヴィンが町に帰って来たのはミス・アメリカに仕返しをするためでした。二人は直ぐには争わず、静かに相手の様子を窺います。

不思議なのはライマンで、彼はマーヴィンに会った瞬間に彼に魂を吸い取られたようになり、邪険にされながらも彼に付きまとうようになりました。訴訟では相手に対して迫力勝ちをするほど気の強いミス・アメリカなのに、マーヴィンの後を追いかけるライマンに彼女はなぜか一言も文句を言わず、ライマンと一緒に酒場に来るマーヴィンには食事や酒も無料で提供せざるを得ません。遂に、ライマンはマーヴィンを家に連れてきて同居させますが、彼女はマーヴィンを追い出そうとしません。彼を追い出せばライマンを失うのが分かっているのに、独り暮らしの恐ろしさに耐える位なら長年の敵とでも同居する方がまだましだというのです。

2月2日のウッドチャックの日に決戦ということが暗黙のうちに了解され、大勢の人達が酒場に集まりました。決闘は皆が見守る中、打ち合いで始まり、暫くしてから取っ組み合いになりました。裸の上半身に豚の脂をたっぷり塗ったマーヴィンはつるつるして捕まえにくかったのですが、激しい戦いの末、ミス・アメリカはマーヴィンをねじ伏せてその上にまたがります。彼女のがっしりとした大きな手がマーヴィンの喉にかかり、勝負あったと思われた丁度その時、突然、ライマンが叫び声をあげて宙を飛び、ミス・アメリカの背中に飛び降りて彼女の首をぐとつかみました。形勢が逆転して大混乱になり、彼女は床に倒されました。

マーヴィンは酒場を滅茶苦茶に破壊して町を去り、ライマンも彼の後について出て行きました。数年後には、酒場の存在もそこでの争いもすっかり忘れられ、何の変哲も無い寂しい町が残っただけでした。

愛の擦れ違いと孤独を描いたストーリーは重苦しい内容の筈ですが、風景や雪の描写が美しく不思議な明るさがあります。

#### 参考文献

1. Carson McCullers "The ballad of the sad cafe : and other stories" (Mariner Books, 2005)
2. カーソン・マッカーラーズ著 西田実訳  
『悲しき酒場の唄』(白水社、1990)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)